

仕事が憂鬱だ。

それは多忙な自分の会社の勤務体制もある。ホワイト企業？なにそれ都市伝説？とでも言いたくなるような弊社は、早出やサービス残業は当たり前、終電に帰れないこともしばしば。けれども、私の頭を悩ませているのはそれだけではない。

最近夜道で着いてくる足音。ポストには毎日のように差出人の書かれていない手紙が詰め込まれ、『愛してる』だの『結婚しよう』だのと言った文面が並んでいる。街中でも時折視線を感じることもあり、典型的なストーカーがいるのは明らかだった。警察に相談もしたが実害がないと動けないと定型文のような返事をもらい、社畜な私は私生活の時間があまり取れないこともあり対策も取れないまま鬱々とした日々を過ごしていた。だから最近では家に帰るのも億劫になり、終電を逃してビジネスホテルに泊まった時にはホッとしている自分すらいる。

そして今日は一週間ぶりの自宅への帰宅。家が近づいてくるにつれて嫌だなあ、もうストーカー諦めてくれないかなあと思いつながら重い足取りで帰路を辿る。しかししばらく歩いて気づいたのだが、

今日はいつも聞こえる背後から着いてくる足音がない。何度か背後を振り返ってみたのだが怪しい人影もなく、もしかしてストーカーがいなくなったのだろうかと思うと徐々に笑みが溢れてきた。よかった、やっといなくなったんだ、長かったなあ…と感慨を覚える私の足取りは軽い。こんなに家に帰るのを嬉しく思うのは本当に久しぶりだ。ウキウキしながら玄関を開け、久しぶりの我が家の空気を吸い込んで――

「…ん？」

そこで気づいた違和感。久しぶりの我が家は随分と甘ったるい香りに満ちていて、こんな芳香剤なんて置いていたかなあと首を傾げる。一応ルームフレグランスは置いた覚えがあるけど…まあ繁忙期が始まる前だから設置自体がかなり昔だが…でも私が買ったのは確かレモングラスの香りで、こんなに甘い香りではなかったはずだ。じゃあこの甘い香りは一体…？

「あ、もしかしてお隣から匂いが入ってきちゃったのかな。最近ずっと換気してないし」

なるほど、それなら納得だ。たまにマンションの共用部で見かけ

た時に挨拶するお隣さんは確かアロマセラピストの仕事をしていると聞いたことがある。だからたまに換気していると自分の知らない匂いが入ってくることもあり、個人的には色々な香りが楽しめてラツキー、くらいに思っていたんだけど…充滿するところなのに濃い匂いになるのか…いやまあ換気していなかっただけが悪いんだけど。後で念入りに換気しておこう。そんなことを考えながら手洗いを済ませ、部屋へと続く扉を開けた私は自分の身体の異変に気づく。

「…ん？なんか身体、熱いような…」

部屋の中は廊下よりもさらに甘い匂いが満ちており、なんだか身体が段々と火照ってくる。もしかして暖房をつけっぱなしにしたのだろうかと上を見上げるも、特にエアコンが動いている様子はない。じゃあなんでだろう、というかこうも身体がジンジンしてくるところ、ムラムラしてくるような…嫌だなあ、最近ずっと忙しかったから溜まっているのかな。明日も早いからさっさと寝たいんだけど…とにかくまずは換気をしようと一緒に窓を指して手を伸ばしたところで、ぬるりとした動きで背後からその手を掴まれた。

「ひゃっ!？」

思わず背後を振り返る。一人暮らしのため私しか住んでいないはずのこの家に、自分以外の人間が立っていた。誰、この人、私知らない…

「…やつと帰ってきたんだ」

「えっ、なに、だれ」

「ずっと待ってたのに…最近ホテルばかり泊まるから中々会えないし、せつかく手紙を書いても読んでもらえないし…いつ帰って来るのか分からないから毎日コレを焚いて…だから濃度がヤバいことになったんだよ。待たされるのももう限界だし…」

「ひっ」

ぐつと顔を覗き込まれ、真つ黒な瞳と目が合う。長身で痩せ型のスーツの男だ。やつれたようなどんよりとした表情をしている。もつとハキハキと話せば見た目はイケメンなんじゃないかと思つたが、今重要なのはそこではない。『会えない』『手紙』というワードが出てきたということは、この人、まさか…

「す、ストーカー…？」

「ストーカー？ああ、そう言えば最近ストーカーに悩まされてるん

だっけ？こんなに怯えちゃってかわいそうに…でももう安心して大丈夫だよ、これからは俺が君のことを守るから…」

「や、やだ！離して！」

掴まれた手を振り解こうとして、視界がぐらりと揺れる。私が状況を理解する前に視界がひっくり返り、気がつけば男に馬乗りになられていた。背中が痛くないということはベッドの上らしい。しかし知らない男に、しかも自分のことをストーカーしていた人間にベッドへと押し倒されていることがわかっていてこれから何をされるのかわからないほど子供でもない。

「ほら、存分に愛し合おう…♡」

男に熱の籠った視線で見つめられて、ぞくりと背中が震えた。やめてください、とか細い声で懇願する私を無視して男の手がするりと頬を撫でる。それだけでも大袈裟なほどにビクツと反応した私を見て、男は猫のように目を細めた。

「もう感じてんの？可愛い♡」

「なに、やめて…」

「ね、ちゅーしよ、俺たち両想いだからいいよね、ね？」

そう言うが早いかすぐさま唇を奪われる。がつつくようなキスをされ、慌てて歯を閉じたが前歯の辺りを男に執拗に舐められ続けた。必死に唇を引き結んで男の舌の侵入を阻止しているせいで、唇の端から男の唾液がつうつと垂れる。気持ち悪さに思わず目をぎゅつと瞑っていると、反応が気に食わなかったのかいきなり左の胸をガシツと掴まれた。

「や、あつ！？♡」

「うわ、いい反応♡どう？気持ちいい？」

「きつ、気持ち悪い、やだぁ♡」

「そんなこと言いながら顔蕩けてんじゃん♡素直になっ  
ていいよ♡」

「あうっ♡むね、揉まないで♡」

無遠慮に両胸を触られて、私は未知の快感に悶える。おかしいおかし、こんな頭のおかしい奴なんかに触られて感じるわけなんてない、のに♡なおもモミモミ♡されていると不意にふわりと甘い香りがすることに気づく。さつきも玄関を開けた時に感じた匂いだ。甘い匂いを吸い込んだ途端、ビリビリと脳が痺れるような心地と共

に男への恐怖と警戒心がぼわくつと薄れていくのがわかった。おかしい、この匂いを嗅いでいたら逆らえない…♡意識がぼんやりとしている間に口が半開きになっていたらしく、男に今度こそ遠慮なくキスをされる。

じゅるっ♡じゅるるるっ♡ぬるっ♡

舌を絡ませられ、歯列や口蓋に至るまで無遠慮に舐められる。とめどなく流し込まれる男の唾液を無意識のうちに嚥下し、飲みきれない分は口から漏れた。溢れた唾液を指で掬い、私の口へと押し込みながら男は恍惚とした表情を浮かべている。

「気持ちいい？気持ちいいよね？♡おっぱい揉まれただけでそんな顔になるんだ♡初めてだから緊張するかと思っただけ媚薬入りのルームフレグランス買っておいでよかった…♡」

「は、はえ…♡？」

「ああ気にしないで、君はそのまま可愛い声を聞かせて…俺だけに…♡」

とろお♡と目尻を下げた男の無骨な手が、ぼやぼやしている私のブラウスのボタンをプチ、プチと外していく。背中に回った手がブ

ラジャーのホックを外し、ずり上げた衝撃で双丘がぶるん♡とまろび出た。火照った身体が冷たい外気に晒されて、触られてもいないのにビクビクと反応してしまう♡好き勝手に胸を揉んでいた骨ばった手が、その中心で控えめに勃っていた蕾をくにと摘み上げた。それだけで、全身に電流が駆け巡ったのかと錯覚するほどの快感が私を襲う。

「んひい♡♡」

「乳首、敏感なんだな♡いっぱい触ってあげるから気持ちよくなるうな♡」

「やだっ♡やだやだ触らないでえ♡♡こねこねしないで♡♡」

「こんな気持ちよさそうなのにあ、そうか触られるよりも舐められる方が好きなんだな♡そうかそうか、じゃあいっぱいペロペロしてあげるからいっぱい感じてるところを見せて♡」

「ちがつ♡そういう意味じゃやらあ♡♡♡ちくびペロペロやめてえ♡♡あたまおかしくなるう♡♡♡」

男の口から真つ赤な舌が見えたかと思うと、ペロペロと犬みたい舐められる♡乳首の先端の方だけを優しくチロチロ♡と舐めくす

ぐられて、ちよつとした刺激だけで大袈裟なほどに身体がビクビクと反応してしまう♡ペロ♡、ペロ♡と男の舌が動くたびに舌から唾液がトロオ：♡と伝って、乳首の先端から根本まで、さらに胸の谷間まで濡らしていく♡唾液が流れていくだけのぬるい刺激だけでもビクビクつと感じるのが止められない♡火照った身体にじわりと浮かんでいた汗と男の唾液が混ざって、おっぱいがドロドロになつていく♡そうしている間に乳首は完全に勃起上がっていた。普段よりもひと回り大きく見える乳首は、まるでもつと触って♡もつと舐めて♡と言わんばかりにビンビンに勃起上がり天井を向いてしまっている。それに気づいた男は、わざとらしく見せつけるようにあーん♡と大きく口を開くと、ぱくりと左側の乳首を口に含む。そしてこちらが止める間もなく、赤ちゃんのように乳首を吸い始めた。

じゅるるる♡♡♡ペロペロ♡♡♡ちゅうううう♡♡♡レロオ♡♡♡ぶちゅうううう♡♡♡

「んひいい♡♡♡それっ♡やめっ♡おっぱいおかしくなるうう♡♡♡ちくびとれちゅううう♡♡♡」

「むちゅ♡はー、乳首うつま…♡♡君の乳首は甘いなあ♡♡もしか

してもうおっぱい出てる？そんなわけないよな、俺以外とこんなことしないもんなあ？早くここから本物の母乳出せるようになるうな♡出るようになったら俺も味見してあげるから♡あ、こっちの乳首ばかり舐めてたら反対の乳首が寂しいよな？大丈夫だよ、今からこっちもいっぱい舐めてあげるから…♡」

「はひいつ！？♡♡♡んああ♡♡♡そんなに激しくなめないでえ♡♡♡ペロペロしないれえ♡♡♡」

ようやく乳首から口を離れたと思ったら、先ほどまでとは反対側の右側の乳首に吸い付く男。じゅるるるうう♡♡♡と右側の乳首を吸い上げながら、反対側の乳首は指でこねこね♡と捏ね回す。吸われている方の乳首も気持ちいいし、捏ねられている方の乳首もさつきまで男が舐め回していた時の唾液でベトベトになっているせいで、男の指で捏ねられるたびにくちゅくちゅ♡と音が鳴る。気持ちいい♡♡知らない男に乳首いっぱいペロペロ♡されてぐりぐり♡されるなんて気持ち悪いはずなのに、気持ち悪気持ち悪い気持ちいいきもちいいきもちいいきもちいいきもちいいきもちいい♡♡♡♡♡

「んああああ♡♡♡♡♡」

男に強く乳首を摘み上げられ、反対側の乳首をカリツ♡と甘噛みされた瞬間に背中がベッドからのけ反る♡♡それと同時に目の前が真っ白になって、ふわふわとした心地で意識が呆然とした。肩で息をしている私の乳首は、さっきまでとは違いぷつくりと赤く大きく腫れ上がり、目の前にいる男をいやらしく誘っている。

「乳首だけでイッちやった？かーわい♡」

「いつ、いつてなんかない、もん…♡」

「強がってる君もかわいいなあ♡でもイッてないのは可哀想だし…それじゃあもつと気持ちよくなって、いっぱいいくところ俺に見せて♡」

嬉しそうに目元を緩めた男は、私の乳首から離れた手でお腹を撫で下ろしてさらに下を指す。そしてショーツにたどり着いた男の手が、クロッチ部分を確かめるように触れた。するとすでに水分を含んでいた布地が、ぐちゅ…♡と湿った音を立てる。それに気づいた男は嬉しそうな表情になった。

「ほら、もうこんなに濡れてる♡濡れたままだと風邪引いちゃうか

ら脱ごうね♡」

「えっちよつまっ」

私の静止を無視して、男がスルスルとショーツを脱がしてしまう。かと思うと間髪入れずに指が割れ目を撫で始め、それだけでまた私の身体はビクッ♡と反応してしまった。上下にくちくち♡と男の指が往復し、茂みを掻き分けて左右に膣肉を開くと、ズボッと躊躇なく男の指が挿入される。

「んあっ!?!♡♡♡」

「こんなに濡れてたら慣らさなくてもいけそうだけど…でも最初だから一応慣らしておこうね♡あく中あったかい♡早く挿れたい♡♡」

「んひっ♡♡かき回すのらめえ♡♡あっ♡あっ♡あぁっ♡♡♡」

「あっ、もしかしてこの辺…?そっかそっか、ここが気持ちいいんだね♡じゃあここでイけるかな♡?」

「やらっ♡同じところばっかいいじめないれっ♡♡そこばっかやらあぁあ♡♡♡♡」

膣壁の中でも一際気持ちいいところばかりを擦られているせいで

ビクビクが止まらない♡♡♡しかし私が同じところばかりは嫌だ、  
という言葉を一応拾ったらしい男は膣内の指はそのままに、反対側  
の手で器用に穴の上にある突起の皮を剥いた。あつ、そこは本当に  
だめ、

じゅるるるるるる♡♡♡♡♡

「んあ、あああああああ！？♡♡♡♡♡」

「んっ♡やっぱり女の子はこっちが気持ちいいんだ♡じゃあ両方使  
って気持ちよくなろう♡♡むちゅ♡♡じゅるるるる♡♡♡♡」

「んひひひひひひ♡♡♡♡♡」

ずぞぞぞぞ♡♡♡♡と下品な音を立ててクリトリスを吸われた  
せいで私は大きく腰を突き出すようにして二度目の絶頂を迎えてし  
まう。しかし男の責める手は休まらず、なおもクリトリスをじゅる  
じゅる♡♡♡と吸い上げながら膣内のGスポットも容赦なく擦り上  
げる。その度にカクッ♡カクッ♡と不自然に腰をカクカクと動かし  
ながら、私はいき狂い続けることしかできない。男に押さえつけら  
れているのとイくたびに力が抜けてしまうため快感を逃すこともで  
きず、地獄のような快感の渦に吞まれていると、不意にお腹の奥か

ら重い感覚が這い寄ってくる。あつ、まってこれもしかして、

「んひあああああああああああああ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

それまでで一番強い快感に襲われ、膣からはぷしいっ♡♡と透明な水が吹き出した。しかもそれが二度三度と続き、男の顔と手を濡らしてしまふ。うそ、もしかして私今、漏らした…？

「あつ、潮吹いちゃったんだ♡可愛い♡♡よっほど気持ち良かったんだね♡」

「し、しお…？♡」

「そうそう、別に恥ずかしいことじゃないよ♡おしつことは違うから…まあ君がお漏らししても俺は幻滅したりしないから大丈夫だけど♡」

なかなか気持ち悪いことを言われている気もするが、イッたばかりの頭ではいまいち考え事もできない。ずるつと男の指が膣から抜かれ、それが物足りないとかばかりに膣の入り口がくぼくぼ♡と震えているのが自分でもわかる。男も同じことに気づいたらしく、恍惚とした顔のまま手早く自分のスーツとワイシャツを脱ぎ捨て、スラックスのベルトをカチャカチャと慌しく外す。スラックスの下か

らはグレーのボクサーパンツがお目見えし、明らかに前側に大きなシミができてるのが見えた。しかしそのすぐ後に男がパンツを脱ぎ捨てると、ぶるんっ♡と立派な陰茎が現れる。ガチガチにそそり立つ男の陰茎は長いだけでなく太さも立派で、亀頭がでっぷりと太っていた。この人こんなに細いのに、こんなに大きなおちんちんだ：その大きな亀頭の先っぽからは、透明な先走りがトロオ：♡と垂れていて、私の目は自然にそこへ釘付けとなった。

「欲しい？♡」

「えっ…あ、いやダメ！」

「今さら強がらないでよ、今欲しそうに見てたでしょ？めちやくちやちんぽ欲しい♡って顔してるよ」

「そっ、そんなわけない！そんなわけないから！」

「ふーん？じゃあなんでここはビクビクしてるの？♡」

「あっ！？♡♡や、やだ！♡♡♡」

不意打ちで男の指が再び膣に入ってきて、ぐちゅぐちゅ♡とかき回される♡しかも今回はさらに奥にまで入り、コッソ♡と指が最奥まで届いた。

「ほら、子宮もうこんなに下がってきてるよ？♡俺とセックスしたい♡ザーメン欲しい♡っておねだりしてるもん」

「やつやらあ♡♡ゆび、ぬいてええ♡♡♡」

「抜いちやっていいの？こんなに気持ちよさそうなのに♡」

そう言いながら指でポルチオをぐりっ♡といじめるものだから、私はあられもない声を上げ続けてしまう。さっきのGスポットとは違うけど、こっちも気持ちいい♡♡Gスポットは連続ですぐにイけるけど、ポルチオは快感が徐々に溜まっていく感じがする。このまま最大値まで快感が溜まっちゃったら、私どうなっちゃうんだろぅ…♡逃げなきゃいけないのに、怖いはずなのに、未知への快楽への期待で勝手に膣壁をきゅうっ♡と収縮させて男の指を締め付けてしまう。男もそれに気づいているらしく、ぐりぐり♡とポルチオを苛める手を止めない。

「ほら、また指でイカされちゃうよ？いいの？」

「や、やめ…♡やめてえ…♡♡もどれなくなりゅ…♡♡」

「うんうんそうだよね、このままなんて嫌だよね？じゃあ止めよう」